感性を育む和学講座第２７回

～五月五日　やまと言葉国学の世界観における人間のはじめ～

五月五日は端午の節供、菖蒲の節供です。

これも五節供の一つです。

現代の五月は爽やかな気候ですが、旧暦の 5 月は 6 月。

梅雨の季節で、湿気があり、「忌み月」とも呼ばれていました。

「端午」の意味は、旧暦で午の月は五月。五月の最初の午の日を

節供としていました。後に午と五が同じ発音だったことから五月五日に変わったそうです。

・古代中国の屈原崇拝

紀元前 278 年に楚の家臣である屈原が失脚して川に身を投げたのが五月五日であり、屈原の供養が端午節となったという説があります。しかし、昨今は信ぴょう性が疑われており、屈原のことは端午節とは関係ないとされています。

端午節の起源としては、夏殷周代の暦法で夏至だったという説もあります。

・菖蒲の節供

端午節に菖蒲などの薬草を厄除けに用いたというのは隋朝の文献に見られます。

日本でも菖蒲を髪飾りにして宮中に人々が集い、天皇から薬玉（くすだま・薬草を丸く固めて飾りを付けた）を賜りました。

当時の貴族社会では、薬玉を贈り合う慣習がありました。

611 年推古天皇の御代に宮中で薬狩りを行った記録が「日本書紀」に残されています。

また、天智天皇の御代 668 年にも近江の蒲生で、宮中の薬狩りが行われました。

薬狩りとは、男性は鹿の角を狩り、女性は薬草摘みをします。

　この時に詠まれた有名な和歌があります。

あかねさす紫の行き標の行き　野守はみずや君が袖振る

（額田王が大海の皇子に贈った歌）

紫草のにほへる妹を憎くあらば　人妻ゆえにわれ恋ひめも

（大海の皇子が額田王の歌への返歌）

「袖振る」は相手の気を引く→相手の魂を引き寄せる→魂乞い

「袖振る」は相手の気を引く→相手の魂を引き寄せる→魂乞い

↓

戀(恋)

袖振る→振袖　未婚女性の正装

・日本では女性の節供

日本においては、神事である田植えが始まる時期です。

田植えは早乙女と呼ばれる女性が担っていました。

神聖なる田に入る前に、女性が菖蒲やヨモギで葺いた家で閉じこもって

穢れを祓う風習がありました。

その間、男性は外に出ていました。

この風習は近松門左衛門が五月五日のことを「女の家」と述べています。

・男子の節供

現代では男の子の成長を祝い、健康を祈る節供となっています。

鎌倉時代になると菖蒲と尚武をかけて、また菖蒲の葉が剣を連想させることから、男の子の節供と江戸時代に制定されました。

しかし、武家の社会になる前、平安時代には、流鏑馬の起源と云われている「騎射」がありました。

武家では鎧、兜などの武者人形を飾っていました。鯉のぼりは庶民から出た風習です。

・粽（ちまき）と柏餅

粽は中国から入ってきた食べ物です。前記の楚の政治家屈原の命日が 5 月 5 日。民衆が屈原を悼んで、餅を川に投げ入れました。屈原の霊が表れて、餅は竜に食べられてしまうので、楝樹（おうち）の葉に包んで魔除けに五色の糸で縛って投げ入れてほしいと言ったのが、粽の起源とされています。

・柏餅

柏の葉は新芽が育つまで古い葉が落ちないことから、家系が続き子孫繁栄という縁起を担ぎ、端午の節供と結びついたとされています。

・鯉のぼり

　武家の幟を飾る風習を、江戸時代に商人が幟の竿頭に中国の登竜門にちなんで鯉を象ったものを掲げたのが広まりました。また、商家に男子が生まれたら幟を上げる風習があったからという説もあります。

・こどもの日

1948 年 7 月 20 日公布・施行

祝日法によると「こどもの人格を重んじ、こどもの幸福をはかるとともに、

母に感謝する日」日本の母の日